

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

<p>学位申請者</p>	<p style="text-align: center;">中村 雪子 【ジェンダー学際研究専攻 平成18年度生】 (平成27年3月31日 単位修得退学)</p>	<p>要 旨</p>
	<p>開発政策としての「女性酪農協同組合」をめぐるポリティクスとエージェンシー：インド、ラージャスターン州を事例に</p>	<p>本論文は、インドにおける農村女性のエンパワーメントを目的とした開発プログラムである「女性酪農協同組合」を対象に、その政策の歴史的背景の批判的検討と、実際にローカルな場所で展開されている協同組合が何をもたらしているかを、女性のエージェンシーという視点から考察した研究である。</p>
<p>審査委員</p>	<p>(主査) 教授 熊谷 圭知</p>	<p>本論は第一部（1～4章）と第二部（5～9章）に分かれており、前半ではインドにおける女性酪農協同組合の位置づけが、後半ではラージャスターン州におけるフィールドワークに基づく考察が論じられる。</p>
	<p>教授 棚橋 訓</p>	<p>第1章では、研究の目的と方法が述べられる。第2章では、研究の枠組みとしての「開発とジェンダー」論が再検討される。第3章では、インドにおける農村酪農開発と酪農産業の展開が語られる。第4章では女性酪農開発プログラムの成立と開発主体としての「農村貧困女性」の生成が論じられる。第一部で明らかにされたのは、インド国家の開発政策としての女性酪農協同組合の成立過程には、グローバル・フェミニズムの展開、インドのフェミニズム固有の状況、女性を対象としたNGOの活動、酪農協同組合の担い手、よき開発主体としての農村女性という言説等の諸要素が、絡み合っていることである。</p>
	<p>教授 小林 誠</p>	
	<p>教授 水野 勲</p>	
	<p>助教 倉光 ミナ子</p>	
		<p>第5章では、調査地ラージャスターン州の概要が紹介される。第6章では、筆者の2000年夏以来の12回のフィールドワークの概要と研究者としての立場性の変化が語られる。第7章では、ラージャスターン州の酪農開発と女性酪農協同組合の実態が、協同組合選挙の観察を含めて論じられる。第8章では、女性酪農協同組合をめぐる女性たちと男性たちの諸実践が語られる。そこでは女性たちの実践が、既存のローカルな社会権力構造に強く規定されていることが示される。</p> <p>最後の9章では結論として、新自由主義化のインドにおける女性酪農協同組合が、「良き開発主体」としての女性の動員や、既存のローカルな社会の権力関係の強化・再構築といった問題を孕み、女性のエージェンシーという視点からの一義的な評価は困難であるとしながらも、「状況づけられた主体」として関係性の中で生きる女性たちのミクロレベルの実践とそれに伴う社会構造の変化の兆しが主張されている。</p>